

## 円山応挙の幽霊画 —上方から江戸へ—

講師：横谷 賢一郎先生（大津市歴史博物館 学芸員）  
令和元年 8月3日（土） 於：草津宿本陣 楽座館

今回の演題は「円山応挙の幽霊画—上方から江戸へ—」ということで、少しでも雰囲気を感じていただけたら…と、いつもの「くさつ・歴史発見塾」から趣向を変え、夏真っ盛りの史跡草津宿本陣敷地内の楽座館にて夕方からの開催となりました。

ご講演いただいたのは大津市歴史博物館 学芸員の横谷賢一郎先生です。なんと先生はお着物姿でご登壇くださったので、まさに真夏の夕方にふさわしい雰囲気のなかで開催することができました。



円山応挙の幽霊画というと足のない幽霊を初めて描き、その後の幽霊画表現に大きな影響を与えたとされていることはご存じの方が多くはないでしょうか。現在、応挙筆として伝来している幽霊画は主だった作品だけでも、海外の大学や国内の寺院などの所蔵品が挙げられ、いずれも「洗いざらしの垂髪」「白装束」「懐に右手を差し込む」「下半身は消失」という定型の表現で描かれています。

そして先生曰く、これら幽霊画のもう一つの共通点は「艶っぽい」ということでした。なるほど、確かに絵全体に漂う寂寥感のなかに、人間の女性であったことをうかがわせる艶っぽさが表現されているように思います。

一方で応挙は美人画の名手でもあり、その美貌や細やかな仕草まで表現した美人画は、上品で温和な作風で、幽霊画に描かれた女性とは少し違います。

先述のとおり応挙の幽霊画は、後の幽霊画表現に大きな影響を与えたとされていますが、幽霊画から描かれた女性が出てくる「応挙の幽霊」という滑稽噺も創作されました。先生はそのエピソードも語って下さったのですが、その語り口調がとてもお上手だったので思わずヒヤッとしてしまいました…。応挙の幽霊画の影響は絵画以外にも及んでいたのですね。

このように今回のくさつ・歴史発見塾では幽霊画をテーマにご講演いただき、時折ゾクッとするとともに、応挙をはじめとした幽霊画の作風や与えた影響、変遷など美術史的な側面について学ぶことができ、夏にぴったりの講座を開催することができました。